

外科系プロジェクト研究の現状と方針

研究分担者 杉田昭 横浜市立市民病院臨床研究部 部長

研究要旨：炎症性腸疾患に対する外科治療の適応の検討、手術術式および術後管理の工夫、予後の分析と向上などを目的として現在、以下の外科プロジェクト研究を多施設共同で行っている。

潰瘍性大腸炎： 難治性回腸囊炎の治療；本症の治療は従来より抗菌剤が使用されており、平成 28 年度本研究班業績集の潰瘍性大腸炎外科治療指針に使用期間の延長などが記載されたが、中止困難例、無効例が存在する。現在、新しい注腸ステロイド剤、生物学的製剤などが使用される例があり、その有効性の検証を行う予定である。大腸癌、dysplasia 症例の治療方針の検討（多施設共同研究）；癌サーベイランスプログラムの確立プロジェクトで手術例 406 例の臨床病理学的検討から癌サーベイランスの有用性と発症時期の遅い症例での留意点などを提唱し、Am J Gastroenterol に掲載された。本症の治療目的である QoL の向上のために、外科治療、内科治療を行った症例の QoL を適確に判定する尺度の素案の作成を行い、更に最終的な分析項目を決定する予定である。Crohn 病： 直腸肛門管癌に対する癌 surveillance program の有用性の検証；症例集積をさらに継続して多数例での結果の解析を行う。現在までの登録症例のうち定期的検査を継続する症例を選定し、本癌 surveillance program の有用性を検討する予定である。小腸癌、腸管外悪性腫瘍の全国アンケート調査結果を分析した。今後、診断指針を検討する予定である。「クローン病肛門病変の診断、治療指針」の改訂；「クローン病肛門部病変のすべて」アトラスの改訂を終了し、冊子を作成した。初回腸切除または狭窄形成術後の再発危険因子の検討 - prospective study - : 370 例を集積予定で、現在までに 237 が登録されている。術後吻合部潰瘍性病変の評価（再発の評価）；集計した 324 例を解析中で、吻合部潰瘍の再発に関する意義を明らかにする。腸管ペーチェット、単純性潰瘍に対する外科治療の現況調査：現在アンケート調査施行中で 87 例を集積、解析中である。

潰瘍性大腸炎、Crohn 病治療指針改訂プロジェクト（責任者：中村志郎先生）で潰瘍性大腸炎術後重症度分類の最終案の作成、難治性回腸囊炎の治療の検討中である。今後も適宜、改訂予定である。

共同研究者

二見喜太郎（福岡大学筑紫病院外科）
池内浩基（兵庫医科大学炎症性腸疾患講座
外科部門）
福島浩平（東北大学分子病態外科）
畑啓介（東京大学大腸肛門外科）
舟山裕士（仙台赤十字病院外科）
根津理一郎（西宮市立中央病院外科）
藤井久男（吉田病院）
板橋道朗（東京女子医科大学消化器、一般外科）

小金井一隆（横浜市民病院炎症性腸疾患科）
篠崎大（東京医科学研究所腫瘍外科）
亀山仁史（新潟大学消化器、一般外科）

A. 研究目的

炎症性腸疾患に対する外科治療の適応の適正化、適正な手術術式および術後管理、それらに基づく予後の向上の検討によって外科治療の位置づけを明らかにしていくことを目的とし、各種の多施設共同研究によるプロジェクト研究を行う。

B. 研究方法

本研究班で潰瘍性大腸炎、クローン病、腸管ペーチェット病または単純性潰瘍についての現状分析、治療法の改善について外科プロジェクト研究を行う。

(倫理面への配慮)

参加施設の症例を匿名化して結果を集積、分析することとしている。

C. 研究成果

1. 潰瘍性大腸炎

本症の治療は従来より抗菌剤が使用されており、平成 28 年度本研究班業績集の潰瘍性大腸炎外科治療指針に使用期間の延長などが記載されたが、中止困難例、無効例が存在する。現在、新しい注腸ステロイド剤、生物学的製剤などが使用される例があり、その有効性の検証を行う予定である。大腸癌、dysplasia 症例の治療方針の検討(多施設共同研究); 癌サーベイランスプログラムの確立プロジェクトで手術例 406 例の臨床病理学的検討から癌サーベイランスの有用性と発症時期の遅い症例での留意点などを提唱し、Am J Gastroenterol に掲載された。更に集積した ESD150 例の予後ほかを検討する予定である。本症の治療目的である QoL の向上のために、外科治療、内科治療を行った症例の QoL を適確に判定する尺度の素案の作成を行った。更に最終的な分析項目を決定し、それに基づく QoL 分析を行う予定である。

2. Crohn 病

直腸肛門管癌に対する癌 surveillance program の有用性の検証; 症例集積をさらに継続して多数例での結果の解析を行う。現在までの登録症例のうち定期的検査を継続する症例を選定し、本癌 surveillance program の有用性を検討する予定である。小腸癌、腸管外悪性腫瘍の全国アンケート調査結果を集計、分析が終了した。今後、診断指針を検討する予定である。「クローン病肛門病変の診断、治療指針」の改訂: 「クローン病肛門部病変のすべて」アトラスの改訂を終了し、冊

子を作成した。初回腸切除または狭窄形成術後の再発危険因子の検討 - prospective study - ; 370 例を集積予定であり、倫理委員会での承認を受けた施設で現在までに 237 例が登録されている。症例の登録を継続する術後吻合部潰瘍性病変の評価(再発の評価); 集計した 324 例を解析中で、吻合部潰瘍の再発に関する意義を明らかにする。

3. 腸管ペーチェット、単純性潰瘍に対する外科治療の現況調査

現在アンケート調査施行中で 87 例を集積、解析中である。

4. 潰瘍性大腸炎、Crohn 病治療指針改訂プロジェクト(責任者: 中村志郎先生): 潰瘍性大腸炎術後重症度分類の最終案の作成、難治性回腸嚢炎の治療の検討中である。今後も適宜、改訂予定である。

D. 考察

各種の多施設共同研究により炎症性腸疾患に対する外科治療の位置づけを明らかにして、適正な外科治療を行うとともに、外科治療の向上をはかる必要がある。

E. 結論

炎症性腸疾患に対する外科治療の位置づけは内科治療、外科治療の変遷によって変化している。各種のプロジェクト研究によって、治療の目標である QoL の向上のために、適切な治療法の選択と治療成績の向上をはかることが重要である。

F. 健康機関情報

特になし

G. 研究発表

今後予定

H. 知的財産権の出願、登録状況

特になし